ハニー・ファミリー

nardhire

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハニー・ファミリー

【Ｎコード】
Ｎ９５７５Ｋ

【作者名】
ｎａｒｄｈｉｒｅ

【あらすじ】
『お母さん！』
歓喜の声と同時に見目麗しい青年に抱きつかれてしまった私、７歳幼女。
しかもこの青年、前世での元息子である。
蜂蜜のような甘い青年（２７歳息子）と、黒蜜色の髪の幼女（７歳母）が再び家族になる話。

再会……？

『お母さん！』

歓喜の声と同時に見目麗しい青年に抱きつかれてしまった私、七歳幼女。

うーん、どうリアクションしろと？

困ったことに、この青年、見知らぬ変態というわけではないらしい。

「離れてくれないエドワード。変態に襲われた可哀そうな少女を正義感あふれる皆様が救出にきてしまうわよ」

『おおおお母さん！　僕が、僕がわかりますか？　あなたの息子の』

「さっきからエドワードと呼んでるでしょうが。幸いなことにこの優秀な脳は自分の息子を忘れてはいないようよ」

『それはよかった』

やっと離れた青年は、にこりと笑って私をそのまま抱き上げた。

蜂蜜色の髪と青い目の外人青年は、その容姿によーく似合う甘い笑みをたたえていた。

うむ。ますます父親にそっくりのハンサムになったなーと年に似合わぬ感慨にふけっていると、息子は楽しそうに、無邪気に笑った。

『ちっちゃくなりましたね、お母さん』

「お前はおっきくなりすぎ。あれからまた背が伸びたんじゃない？」

『そうなんですよ。お母さんがいなくなったときはまだ成長期真っ最中でしたからね。お母さんは、今どうしてるんですか？』

「どうしてって」

そこで私は周囲の奇異の目がちらほらとこちらに投げられているのに気づいた。なにか注目されるようなことがあったか、考える。思い当って、私は脳を切り変えた。

うん、外国人の青年と日本人の少女が日本語と英語で会話をしていたら変な目で見るよね。

『御杉月湖、《ムーン・レイク》のツキコ。七歳。両親は二歳のときに心中。以後は施設にいる。まあ、要するに孤児ね。養子にという申し出はまあこの美貌だから雨霰とあるが、そのうち３０％は目がいやらしいし、５０％は道具扱いにしようという魂胆が見え見えだし、残りは優しそうだが、厄介事に巻き込みたくない。だから全部断っているの。人身売買まがいの申し出もあるけど、そこは院長が人格者でね。助かっているわ』

『はー。前の人生に負けず劣らず、災難な人生を送ってますね、お母さん。それにしても今日はどうしたんです？　七歳なら、こんなところに一人で来られるはずがないでしょうに』

息子が抱き着いてきたのは、施設の最寄り駅に隣接する百貨店だった。もちろん、七歳幼女である私が、こんなところにひとりで来られるはずがない。

『うむ。絶賛迷子中』

嘘である。はぐれたのは引率の施設員が自分の買い物がしたいために子供たちを放置したからだし、子どもたちもいつものことなので、各々おもちゃ売り場や本屋などを好きに見回って、鐘の音を合図に集合場所に集合することにしている。

毎月このデパートには来ているから、慣れたものである。デパート側もある程度は見逃してくれているようだ。

『じゃあ僕とお茶でもしませんか？　その後で迷子放送かけてあげますよ』
『あー……実は15時20分に大時計のまわりに集まってればOK。恒例行事なんだ』

そういって、私はざっと説明をして、息子にケーキをねだった。

『それにしてもお母さんにまた会えるとは思いませんでしたよ』
『そろそろ日本語でしゃべらない？　周りに客も少ないことだし、英語を必死で思いだしながらしゃべるのも疲れてきた』
「お母さんがそういうなら、そうしましょうか。ああ、月湖と呼んでいいですか？」
「人前ならOK。二人きりの時によばれるのは母親としてなんとなく嫌。慣れるまでは人前でだけにしてくれるかな」
「僕も二人きりの時まで呼び捨てにする勇気はありませんよ。でも月湖も変な目で見られるのは嫌でしょ？」

そんな気遣いをさらりとできる息子に、可愛くなって、私は腕をうんと伸ばしてテーブルのむこうの頭をなでた。

「いい子に育ったねえ」
「当たり前です。誰の子だと思ってるんですか。月湖こそ、その姿かわいらしすぎですよ。それにしても、本当に、また会えるとは思ってなかったので、嬉しいですよ」

息子には申し訳ないが、私は高校生ぐらいになったら息子に会いにいく気満々だった。
息子は、人の魂の色が見えるのだという。残念ながら特殊能力な

どかけらもない私には、それがどういう感覚かはわからないが、夫の家系にはそういう変な能力を持った人間が生まれやすいらしい。夫もそうだ。

人の魂の色は一人一色。指紋と同様、同一の色を持つものは天文学的確率らしい。だから転生などしたら一発で見抜ける。……理論上は。

現実はそんなに甘くない。たとえば知りあいが死んだとする。その人の魂が転生したとして、何年後に、どこの国で、どんな性別で、どんな境遇で生まれたかは実際に見つけるまで分からない。見つけられたとしても、新しい人生を歩むその人は、前世のことなど覚えていない。

そのはずなのだが、私はなぜか二歳のころに前世の記憶を思いだしていて、まだ七歳の現時点で偶然、前世での息子に見つかってしまった、というわけだ。

息子としては、まさか転生した母親を見つけられるとは思わなかった。見つけた母親に前世の記憶があるとは思わなかったと驚きの連続だっただろう。

こちらも驚いた。まさか息子が日本にいるとは思わなかった。

「私も嬉しいわよ。エドワードはなんで日本にいるの？」

「長期出張でこちらに赴任しているんです。来年にはイギリスに帰りますよ。そうだ、月湖。僕の養女になりませんか？」

「国籍の違う者同士の養子縁組って、可能だったっけ。あと、イギリスって独身だと養子縁組不可じゃなかった？」

「国際養子縁組は可能ですよ。月湖が七歳なら、保護者の許可がいりますがね。あと僕は一応結婚しているのでそっちも問題なしです」

「アホか。結婚してるなら奥さんの承諾も取りなさいよ」

息子の申し出は、正直嬉しいものだった。突然の死によって別れた息子と会えたのだ。一緒に暮らしたいと思うのは当然のこと。

そうか国際養子縁組って可能なのか。保護者…私の場合だと……うん、祖父だ。あの爺に電話するのやだなあ。そっか、息子、もう結婚してたのか。

……は？

「月湖なら大丈夫ですよ。可愛い女の子が欲しいっていってましたし、子どもができてもできなくても孤児を最低一人は引き取ろうねって話しあってましたし」

「なんて出来た奥さま。って、奥さんも日本にきてるの？」

「奥さん、バリバリのキャリアウーマンなんですよ。今も本国でバリバリ仕事していますよ、たぶん。で、どうです？」

そう聞かれたとき、私の心はすでに決まっていた。息子に養われる？　親の威厳？　それがどうした。今の私は子どもだし、孤児は社会的に不利なのだ。それは以前の人生でも思い知っている。それになんといっても家族になるのがエドワードだというのは悪くない。

「うん。いいね。悪くない」

それに、今まで養子縁組の申し出をうけなかったのは、一番の理由はやはり、私にとって家族とはいまだに彼らだけだから。

「奥さんに会って、奥さんが承諾してくれたら、また家族になろっか」

私は五年ぶりに、心の底から緊張がとけて、楽になったのを感じ

た。

再会……？（後書き）

初投稿です。文章の下手さなどには目をつむっていただけると助かります。

通話（前書き）

エドワード視点です。

通話

《もしもし。何？　忙しいんだけど》
「ごめんね。早く相談したくてさ。母を見つけたんだ」
《母って、十年前に亡くなったお母さま？　転生して日本に生まれていたの？》

不機嫌だった奥さんの声が、一転して真面目になった。

僕らの一族は、不思議な力を持つ確率が高い。そのため、結婚を考える相手には自分の力と一族の特殊性を話して受け入れてもらわなければならない。
それが面倒で結婚を厭っていたのも今は昔のこと。奥さんはそんな僕を熱意と根性で口説き落としたのだ。完敗だった。白旗を振って降参した。今はそれに感謝している。

「そう。しかも以前の記憶もそのままに、ね。奇跡だろう？」
《奇跡ね。それで、相談って？》
「うん。母を養子にしたいんだけど、いいかな。黒髪の美少女だよ」

奥さんの趣味を突いた誘惑に、奥さんはあっさりと乗ってくれた。
《よし、出来るだけ早く休暇取ってそっちに行くから、そのお母さまに会えるよう手配しておいて。お母さま、何がお好き？》

奥さんの声が弾む。仕事大好きな奥さんは、子供も大好きなのだ。特に女の子が。
「今の嗜好はわからないな。会うのはいつでも会えると思うよ。ま

だ七歳だし、一応明日にでも母のいる施設に行って繋ぎをつけるつもりだし」
《施設って……もしかして、お母さま、孤児なの？》
「そう。詳しいことはまだ知らないけど、結構悲惨な人生みたい。だけど僕はツキコに幸せになって欲しいし、家族になりたい。ということで養子縁組を考えてるんだけど、どうかな」
《今のお母さまの名まえ、ツキコというの？》
「うん。ムーン・レイクという意味の漢字の月湖」
《実際に、ツキコに会わないままに決めるのは軽率だと思うけど、わたしもあなたの自慢のお母様にお会いしたいし、家族がおられないのなら私たちの家族になって欲しいと思うわ》
「セリアがそう言ってくれたってお母さんに伝えておくよ。今日は動揺していて忘れていたけど、明日施設に行って話を通すついでにお母さんの今の写真も撮ってメールで送るよ」
《よろしくね。お義父さまにはこのことはお伝えしたの？》
「まだ。お母さんにも父さんの再婚のこと、伝えてないし。まずはお母さんのほうに話してからにしようと思っている」
《そうね。そのほうがいいかもね》

正直、転生して前世の記憶を持っている人間など、一族でも記録に残っていない。いや、前世の記憶を持っているだけならまだ例がないわけではない。しかし生前、一族にかかわっていた人間が転生し、記憶を持っているなど初めてのことである。珍品中の珍品だ。
だからエドワードはわからない。転生した母が、父のことをどう考えているのか。
以前の意識のままに、まだ父を愛しているのか、それとも新しい月湖としての意識が強いのか。
亡くなった妻が転生していたことを、知らせられなかったら、父は傷つくだろう。父は今の妻も愛しているが、亡くなった母のこともいまだに愛しているのだから。

だが、父が自分以外の女性と生きていることを知った母は、父以上に深く傷つくのだろう。かつての母にとって、父は全てだったのだから。

重い話を終えて、お互いの近況を軽く話して、エドワードは電話を切った。

そして自分の住んでいる部屋を眺めて、少女を迎えるにふさわしい準備を考えはじめた。

思い出

面会人がきたといわれて行ってみると、案の定そこには蜂蜜のような甘さを垂れ流す青年が待っていた。

「おはようございます、月湖。朝早くからすみません」

「待っていたから、来てくれて嬉しいよ」

再会した翌日には施設の責任者（通称：院長）に話を通し、足しげく通うようになった息子。

短い面会時間で、向こうは奥さんのこと、私は近況などを目一杯しゃべり倒すのが習慣になっていた。

来週には噂の奥さんもこちらにやってくるらしい。女の子が大好きらしく、私を引き取ることにも前向きらしい。

さて、この一か月、逃げに逃げ、避けに避けてきたが、そろそろ立ち向かわなければならないだろう。

「聞きたいことがあるの」

「なんでもどうぞ」

エドワードは、私が見た目通りの子供ではないと知っているから、何も隠さない。

「ゲイルは今どうしているの？」

今まで、再会してから一か月、不自然なまでに私たちの間で出されることのなかった名まえ。

エドワードの父。私の前世、ダイアナの夫。

「五年前に出会った女性と再婚しました」

エドワードがこれまで何も言わなかったから、その可能性は考えていた。

その可能性に対して覚悟を決めるために、一か月が必要だった。

だが実際にそれを事実として聞いてみると、想像していたほどの悲しさはない。ゲイルを思いだすと今でも温かいものが心を満たすけど、以前のような愛情はない。転生して子供になったからかな？

「そっか。じゃあ会わないほうがいいかな」

「そうでしょうけど、僕が月湖を引き取ったら引き合わせないのは不自然ですよ？」

「じゃあ知らない振りすることにするね。会っても、気づかれないと思う？」

「まあ、大丈夫じゃないでしょうか」

夫も息子と同様、超常的な能力を持っている。しかし息子とは種類が違い、たしか受容的な能力じゃなくて能動的な能力だったはず。

「じゃあ知らんぷり。あっ、もしかして、ダイアナの遺品って、ゲイルの家にあるの？」

「そうですね。まあそれはなんとか父を言いくるめてこっちで引きとりましょう。月湖が欲しいのは、レシピでしょう？」

「当たり。ダイアナの人生の集大成だからね」

ダイアナ、以前の私も家庭にめぐまれなかった。だからダイアナは自分で作り上げた家庭を大切にした。食卓は会話で溢れるように、家族は健康であるように。そのために、特に食事には力を入れた。

家族のために作り上げたレシピは、ダイアナのいちばんの宝物だ

った。

「月湖の料理、大好きですよ」

「一緒に暮らせるようになったら、また作るよ。正直施設ではキッチンを使えないから退屈してたの。まだ小さいから危険なんですって。日本にいるうちに和食も覚えたいわ」

「薄味だけど、日本の料理はたしかに美味しいですね。僕の奥さんは食べることは好きなくせに料理自体は苦手なんです。月湖が料理を教えてくれたら喜びますよ」

「それは楽しそうだね」

エドワードの奥さんに会うのが、また楽しみになった。

チョコレート姫来襲

『ようこそ日本へ』
『来たわよ。お義母(かあ)さまはどう？』
『元気にしてるよ。田舎のお祖父(じい)さんに養子縁組の許可をとるべく奮闘中』
『お義母さま、身寄りがないって話じゃなかった？』
『一応、亡くなった両親の親族はいるらしいよ。けど、みーんな両親が亡くなったときにお母さんを助けようとはしなかったらしいね。保護者は一応お祖父さんということになっているけど、現実はお母さんは保護施設で生活しているしね。でも僕らにとっては好都合。お母さんが国に保護されていたら養子として引き取るのは難しいけど、お祖父さんが保護者ならまだ当事者同士ということで目はあるからね』
『それもそうね。あー、それにしても会えるの楽しみ！　あのお義父(と)(う)さまが惚れ込んでいて、君が未だに崇め奉っているお義母さまに会えるなんて！』
『忠告しておくけど、人前では「お義母さま」とは呼ばないように気をつけてくれよ。変な目で見られてしまうから』
『りょうかーい。じゃ、荷物おいて早速いこうか、ツキコのところへね』

『きゃーっ！　可愛い！』

いつもの面会室に着くなりハイテンションな声に迎えられて、私は面喰って一歩あとじさってしまった。
目の中にハートマークが飛んでいるんじゃないかと思われるその女性は、チョコレート色の髪と整った顔立ちをもち、メリハリのあ

るボディをかっちりしたスーツに包んだ、いかにも出来る女に見える女性だった。うん、その顔がだらしなく笑み崩れていなければ。

『セリア、月湖が引いてるよ。落ち着いて、ドウドウ』

『え？　うわっ、ごめんなさい、ツキコ。あまりに可愛かったもので。初めまして、セリアです』

『初めまして、今は月湖・御杉です。以前はダイアナ・ホープ・レイノルズでした。月湖と呼んでください』

そういって、私は目の前のセリアさんの手をがしっと握った。

『あと、これを口説き落として結婚までしてくれて、本当にほんっとうにありがとう。ひねくれ者の女嫌いだったから、まさかこんなすてきな奥さんができてるとは思わなかったわ』

顎で息子をしゃくりながらいうと、目の前のセリアさんの手に力がこもった。

『そうなんですよ。口説き落とすの、すっごく苦労しました。逃げるし言い訳するし、身内以外の女を信じていないし蔑んでるし、こっちの気持ち無視するし。何度か本気で殺意わきましたよ』

『バカに育てちゃってごめんなさい。それでも落としてくれてありがとう』

目の前で聞えよがしに交わされる苦労話に、自分を無視して意気投合していく妻と母に、蜂蜜色の青年はどんどん追いつめられていた。

チョコレート姫来襲（後書き）

遅くなって申し訳ありません。
これからも思い出したようにぽつぽつと投稿していくことになると思います。
どうか見捨てずお付き合いください。

甘いもの嫌いの氷砂糖（前書き）

遅くなって申し訳ありません。
新キャラが動かしにくくて引っかかっていました。
こんな亀更新にお付き合いいただき、ありがとうございます。

甘いもの嫌いの氷砂糖

月湖には従姉が一人いる。母の年の離れた兄のひとり娘だ。

といっても、月湖の母はすでに亡くなったし、従姉の父は従姉が幼いころに蒸発したので、月湖が彼女と知り合ったのは全くの偶然だった。

始めは互いに似ていることから知り合った。偶然だねえと笑っていた。月湖は母に兄がいることなど知らなかったし、従姉は父のことなど覚えてもいなかった。それがひょんな偶然から従姉妹同士とわかって、だからといって彼女と月湖の関係が変わることはなく、幼女とＯＬは細々と交流を続けていた。

だから、休日にエドワードと従姉が月湖の前で鉢合わせしたのは偶然ではなく、今までなかったことこそが不思議な必然であったといえよう。

「月湖ちゃん、これ、誰？」

『月湖、こちらの方は？』

「くーちゃん、この人、未来のパパ予定の人。ミスター・エドワード・レイノルズ。エドワード、彼女は私の従姉で葛原玖嵐」

二人は沈黙し、私の言葉を考えたようだ。しばらくして、従姉のほうが口を開いた。

「詳細説明を求む」

小学生にそんな難しい言葉で要求されても……。いや、意味わかりますけどね。

「その前に外出ようよ。久しぶりに外出できるの楽しみにしてたん

だから」

日ごろは学校と施設の往復しかできないし、休日も自分の希望でいきたい場所に行くことは不可能なので、エドワードか玖嵐が来る機会は私にとって大切なお出かけの日なのだ。

というわけで、近くの玖嵐ちゃんお気に入りのコーヒー専門店に落ち着いて、私は玖嵐ちゃんに、エドワードが前世での元息子だということだけふせて、出会いからここまでを簡潔に説明した。

ちなみにくーちゃんはまったく英語が話せない。エドワードはこちらで働いてることもあって日本語の日常会話なら困らないので、会話は主に日本語。難しい言葉は私が通訳している。八歳幼女に通訳される情けない大人たちである。

「胡散臭いなぁ」

話を聞き終わったくーちゃんの第一声が、これだ。

私はケーキをつつきながら、エドワードの顔をうかがい見た。

真正面から胡散臭いといわれた青年は、のんびりと「そうでしょうねぇ」と相槌をうった。

「子供のくせにこの子の警戒心は並じゃあないんだよ。初対面であっさり意気投合なんて信じられないね。全部きりきり吐きな。どんな信じられないような話でも否定しないからさ」

「じゃあ、話しますけど、本当に信じられないような話ですよ。僕だって自分の幸運が信じられないし」

「信じるかどうかを判断するのはオレ。ほれ、さっさと話しな」

エドワードの目の前にあるパフェを心底憎々しげに睨みながら言

ったものだから、エドワードがびくりと怯える。
あー、そうだよねえ。こんな目で睨みつけられたら勘違いするよねえ。

「エドワード、今のくーちゃん、エドワードを睨んだんじゃないから。パフェを睨んだだけだから。くーちゃん、こんな甘い見た目をしてるくせに甘いもの大っ嫌いなの」
「ったく、男のくせによくそんな甘いもの食べられるよなあ」

この暴言に、エドワードはむっとした顔になった。
うん、この子小さいときから甘いもの好きだったもんね。

「偏見ですよ。小さいころから母の菓子作りの助手だったんです。甘いものは作るのも食べるのも大好きですよ」
「ん？　私のせい？」
「あなたのおかげ、ですね。セリアにも僕の作る菓子は好評ですし、感謝してますよ、お母さん」

最後の言葉を、包み込むような丁寧さでそっと、エドワードは紡いだ。
玖嵐ちゃんが目を丸くして、ついで険しくした。

「訳がわからないからさっさと説明して」
「んじゃ簡単に。信じられないかもしれないけど私は前世の記憶を持っていて、前世でエドワードは私の息子だったの。以上説明終わり」
「補足。それで僕は人の魂の色が見えるというあんま役に立たない特殊能力を持っていて、それでお母さんがお母さんだとわかったわけです」

にっこり笑いながら言った私たちだが、内心びくびくものだ。こんな常識から外れたことをいって気違い扱いされない自信など欠片もない。
だがどうやらこの外見と中身がかけ離れているお姉さんも、常識から外れた人間だったらしい。

「ふーん」

何でもない風に流されてしまった。

「なんだ、そういうことか。納得。始めから話してよね、そういう面白い事情は」
「信じるの？」
「信じざるを得ないだろ。あんたたち、この前会ったばかりだという割には、笑顔がそっくりだよ。それに、非常識な話には耐性があるしね」

そういって、くーちゃんはコーヒーをぐいっと仰いだ。

「イギリスにうちの副社長がいるから、オレもたまにはイギリスにも顔をだせるかもね。イギリスに行ったらもう日本には戻ってこないのか？」
「うーん、迷ってるねえ。あと一年で料理覚えることはできないだろうし、日本の料理はおいしいしねえ。１５くらいになったら留学して来たいなあとは思うかなあ。まあそれはその時の状況次第だけど、長期滞在は何度かする、かな。生活の基本はイギリスにおくけど」
「それなら寂しくないかな。月湖ちゃん、料理好きなのか？」

くーちゃんの言葉に、答えられなかった。

私にとって料理は手段だ。たしかに料理は好きだ。だけど料理を好きになった動機は……

そう、以前の私も今の私とおなじだった。いや、今以上に悲惨だった。家族はなく、幸せもなく、ただ周囲の笑顔に憧れていた。

料理は、道具だった。私が家族を得るための。

「私の料理で、家族が笑顔になるのが好き」

そう、私にとっての料理はそうだった。

「美人ですね」

「美人でしょ」

いつもは施設まで送ってくれるのだが、今日はエドワードがいるからということで喫茶店でくーちゃんを見送った。

その後姿を眺めながらの息子の一言である。

「でも、中身はオヤジですね」

「そうなのよ」

そうなのだ。梅酒造りにしか役に立たない氷砂糖のように、外見は甘くてもその甘さを完膚なきまでに台無しにしているのが彼女。

まあ、梅酒も美味しいものらしいが。

娘の生還

半年たって、ようやく私たちは手続きをすべて済ませて家族になることができた。ようやくといっても、ひそかに世界中に根を張り巡らしているらしいレイノルズ一族が手を回したので、家裁などの手続きはスムーズだった。

とりあえず、現状では私とエドワードの二人暮らしだ。セリアは本国で仕事があるし、私はエドワードの出張が終わるまでは日本で新しい家族との生活に慣れ、それからイギリスへいくという段取りになったからだ。

二人暮らしはなかなかに快適だ。家事はもともとエドワード一人でやっていたものを私がいくらか引き受けるようになったので、エドワードも楽になったし、私はもともと家事は好きなほうだ。

それに世間的には七歳だが、中身は大人だということを隠さなくていい生活というのは、思った以上に開放感があった。無理しているつもりはなかったが、変な目で見られないよう子供らしく意識しながら生活をするのは、思っていた以上に心に負担がかかっていたらしい。

その緊張がとけた反動で、引っ越してきてすぐ、熱でぶっ倒れたほどだ。三日で全快したが、セリアにはものすごく心配されてしまった。

そんなトラブルもあったが、新生活が始まって一か月、歪(いびつ)な関係の私たちだが、スタートはなかなか順調だった。

まあ、やっぱり体が小さすぎて危険が大きいので、満足に料理ができないのは不満だったが。

さてそれはさておき、現在世間は夏休みである。小学生である私も夏休みを謳歌している。
間近に迫っているお盆にはエドワードも休暇をとれるため、その機会を利用して、生まれて初めて久しぶりにイギリスに行く予定となっている。

ちょうどレイノルズ一族が集う時期とも重なるので、エドワードの養女になった私の顔見せをしに来るようにと、長老のお達しがあった。
長老にお会いできるのは楽しみだ。前世でも長老は、レイノルズ一族のなんたるかをほとんど知らないままゲイルと結婚した私を、あたたかく一族に迎え入れてくれた。
リビングで洗濯物を畳んでいると、軽やかな《愛の挨拶》のメロディーが鳴りはじめた。
エドワードはお仕事で留守。というわけでナンバーディスプレイを拝見。

――Ｃｈａｎｔｅｌｌｅ　Ｒｅｙｎｏｌｄｓ

思いもよらない名前に、慌てて受話器をとってしまった。

『シャンテル？』
『誰！』

無愛想な声が電話のむこうから聞えた。恐らく最愛の兄の家に電話をかけたら知らない女の声がしたというので、瞬時に戦闘態勢にはいったのだろう。ブラコンだった彼女らしい。
だが、私は本当に驚いていた。
私はまさか、彼女が生きているとは思っていなかったのだ。
ダイアナだった私が死んだとき、彼女は行方不明になって既に二

年が経っていたのだから。

『エドワードもひどいよ。シャンテルが生きてるなんて教えてくれなかったから驚いたじゃない。久しぶり、シャンテル。私がわかる？』

二年、二年だ。生死のわからない子供を探し続ける時間としては、決して短い期間ではなかった。

『誰！　セリアじゃないんでしょ？　なんの悪戯か知らないけど、さっさと名乗りなさい！』

怒っている声さえも、彼女が生きていることを教えてくれて、嬉しかった。テレビ電話でないことが、初めて惜しいと思った。声だけでなく姿も見たかった。

『ついこの前、エドワードとセリアの養女になった月湖・レイノルズ。前世ではダイアナ・ホープ・レイノルズという名だったわ』

ガシャン、と耳障りな音がした。恐らく受話器を落としたのだろう。そしてしばらくして、慌てた声が聞こえた。

『ママ？』

『Ｙｅｓ！　お互い聞きたいこと言いたいことたくさんあるけど、とりあえず本題を片づけちゃいましょうか。エドワードは仕事でいないけど、エドワードに何か用なの？』

『ええ、さっきはごめんなさい。用件は……ママのこと。おじい様から、兄さんが前世の記憶がある女の子を養女にしたって聞いて、どんな子なんだろうと思ったんだけど、兄さんひどいわ。ママだなんて教えてくれなかったじゃない』

『ゲイルに知らせないように頼んだから、一族や長老には私がダイアナだってことは言ってないみたいね。シャンテルも、誰にも知らせないでね』
『いいけど、夏の一族の集まりにはママもエドワードの養女として顔見せするんでしょ？　その時にばれるんじゃない？　パパはともかく一族には何人か、兄さんと同系の能力の持ち主がいるし、ママ人気者だし』
『そこまでは考えてなかったわね。まあ、別に何が何でも隠したいわけじゃないし、今の私はダイアナじゃなくて月湖だし。それはばれてから考えましょうそれよりシャンテルは、あの時どうしてたの？』

電話のむこうで、娘が言葉を詰まらせたのがわかった。ちょっと無神経だったかもしれないと私は反省。
彼女にとって母親が死んだときに立ち会えなかったというのは、長く引きずる傷になっただろう。それを遠慮なく引っ掻いてしまった。
だけど、聞いておきたかった。

『能力が、発現したの。わたしの能力は《聖女》ですって。その《聖女》の能力目当てに異世界に召喚されて、帰ってきたのはママが亡くなった直後だったの』

レイノルズ一族にいたのだ。これぐらいの非現実ではもう驚かない。日本でもそれ系の異世界ファンタジーはたくさんある。私の図書館でのお気に入りだ。娘がそれだったというだけだ。
問題は、娘のそれは私の知っているフィクションではなく、現実だったということだ。

『そう。向こうで辛い目にはあわなかった？』

『大丈夫よ。《聖女》様ですもの。大事にされたわ。友達もできたの。辛かったのは、ママたちに無事を知らせられなかったことと、帰ってきたらママがいなかったことだけよ』

『良かったわ』

娘が行方不明だった二年間、最悪の想像ばかりが頭をよぎっていた。

既に死んだのではないか。殺されたのか。今も生きていたとしても、口にするのもおぞましい目にあわされてはいないか。記憶を失って帰ってこられないのではないか。ありとあらゆる希望的観測と、絶望的予想が常に押し寄せてきていた。

真相を知って、ほっとした。

それからは質問攻めにされた。エドワードとどうやって知りあったのか、前世の記憶をいつ思い出したのか、これからどうするのか。

気づいたら、二時間もたっていた。国際電話なのによいのだろうかと料金が心配になってしまう。イギリスに来たら絶対に自分のところにも泊まりに来るようにと月湖に確約させて、ようやくシャンテルは電話を切ってくれた。

イギリスへＧＯ！（前書き）

※ここからしばらくは、イギリス滞在編となりますので、通常カッコ「」でも英語の会話となります。

イギリスへGO！

そしてやってきたお盆である。社会人の夏休みである。
私とエドワードは現在、イギリス行きの飛行機の座席で離陸を待っている。
今回のイギリス旅行というか里帰りは、結構ハードスケジュールだと思う。私がまだ八歳の子どもだということをみんな分かってるのだろうか。
いや、分かっていて予定詰めまくった私も同罪だけどね。
元夫（ゲイル）の家に挨拶の振りして遺品を取りに行ったり、元娘（シャンテル）の家に泊まりに行ったり、レイノルズ一族の夏の集まりに出向いたり。たった三つの予定だけど、一族の集会と娘訪問は泊まりになるから、エドワードの家でゆっくりできる日は少ない。

「ああ、そういえばシャンテルが空港に迎えに来てくれるって」
「げっ！」

息子が隣で呻いた。理由は簡単に予想がつく。

「やっぱり、セリアとシャンテル、仲悪いの？」
「仲悪いっていうか、シャンテルが一方的にセリアを嫌ってるみたいなんですよ。何故でしょうねえ」

それは、そうだろうな。

実はシャンテルは、元私（ダイアナ）の実の娘ではない。シングルマザーだったシャンテルの実母が行方不明になり、一人になったシャンテルを引き取ったのがシャンテルの母の従兄であるゲイルと私だった。それがシャンテルが五歳、エドワードが十歳の時だった。

すでに物心ついていたシャンテルにとって、母の行方不明は心の傷となったのだろう。新しい家族をまた失いはしないかといつも怯えていた。特に兄であるエドワードには懐いていて、いつも後を着いてまわっていた。エドワードもシャンテルを可愛がっていたから、将来この二人が結婚するようになるのかなーなどと考えたりもした。

結果としてはエドワードはセリアと結婚していたし、シャンテルも兄は兄と割り切っているようだ。だがやはり自分を一番にしてくれていた兄がとられたようで、面白くないのだろう。

「シャンテルもまだ、子供みたいね。セリアはシャンテルのこと、どう言ってるの？」

「僕の奥さんは美女と美少女が大好きなんです」

それをきいて私は、初対面の時のセリアの様子を思いだし、吹きだした。

「ああ、ええ。そうだったわね」

「月湖と会った後も、『君と結婚してよかった～。美女と美少女と縁が出来ちゃった』って、僕は奥さんにとって何なんでしょう」

「旦那様でしょ。自信持ちなよ、パパ」

ふざけていうと、エドワードは複雑な顔になった。そんな顔してるけど、戸籍上は親子になっちゃったんだからね。

「分かってはいたけど、ツキコにそう呼ばれたらショックが強いですね」

よしよし、ショック療法成功、かな？　実は私も少しこそばゆい。笑いをこらえるのに必死だ。だけど少なくともさっきまでの暗い空気は見えなくなった。

さて、ここからはママの時間。

「シャンテルだけど、セリアのこと、嫌ってはないわよ。意地張ってるだけ。ほら、覚えてないかな。ゲイルが引き取ったときもはじめは私たちにはぜんぜん心を開かなくて、エドワードにしか懐かなかったの。意地を張って、意地悪をいって、それでも嫌われないかを試してるの。まだあの子は臆病なのね」

エドワードはなにも言わなかった。多分、私が言わなくてもセリアあたりが同じようなことを言っていたのだろう。

ただ、ほっとしたような笑みが、彼が今まで妹と妻の仲を心配していたことを物語っていた。

「ママ……なの？」

「うん、そうだよ。美人になったね、シャンテル」

到着した空港で、記憶にあるより大きく、大人になった娘を見上げて、わたしは感慨にふけっていた。

ストレートのプラチナブロンドとヘイゼル・アイは子どものころから変わっていない。しかし幼かった顔だちは大人の女性の落ち着きを備え、人を寄せ付けない気高さを感じさせる。

まるで雪の女王だ。

昔から美少女だったし、美人になるだろうとは予想はしていたけど、実際に成長した姿を見ると予想以上の美人度だ。美形パーセンテージの高いレイノルズ一族の中でも群を抜く美しさだと思うのは、親馬鹿というものだろうか。

「ママは、ちっちゃくなったわ」
「転生だもの。前世の記憶があるだけのただの子どもだよ」
「ちっちゃくって、可愛い」

ハグというよりお人形さんを抱きしめるような感じで、きゅっと抱きしめられてしまった。

元母で、義理の姪で、これからの関係がどちらになるのかは分からない。
記憶がなければ母として扱われるのは苦痛でしかなかっただろう。でも、記憶があるから、こうしてエドワードにも会えたしシャンテルが生きていることも確かめられた。

「ママの記憶があってよかったわ。記憶がなくてもママに会えたら嬉しいけど、やっぱり、あって良かった」
「私も、そう思うわ」

私たちの再会をよそに、エドワードとセリアも久々の再開に少々熱烈なあいさつを交わしている。
うん、ラブラブな夫婦っていいね。でもあれが今の私の両親かぁ。
そんな私とシャンテルのなまぬるい視線が届いたのか、二人は照れも見せずに全開の笑顔で「じゃ、いこっか」とのたまった。

イギリスへＧＯ！（後書き）

投稿にむらがあって申し訳ありません。
次はそんなにお待たせしないかと思います。

出陣、元マイホーム

「さて確認です。これから行く家では私のことは絶対、ダイアナだとばれないように、お母さんとかママとか呼ばないように気をつけて下さい」

空港をでて、私たちは休む間もなく車で子供たちの父、私の前世での夫にして現世での義理の祖父の家に向かっていた。

「了解、黒蜜姫」

セリアさんは最近、ふざけて私のことをこう呼ぶ。何でも光に透けると濃い茶色になる髪色が、黒蜜を思わせるそうだ。

その表現は気にいったが、この呼び名は気恥ずかしい。でもいくら言ってもやめてくれないので、諦めた。

「黒蜜？」

「和菓子の上にときどきかかっている黒いシロップ（ジャパニーズ・スウィーツ）、髪の色が似てると思わない？」

「ああ、いい表現ね。わたしもそう呼んでいい？　ママ」

おいこらエドワード、ここに来る前セリアとシャンテルが仲悪いっていってたの、嘘？　どう見てもシャンテルの雰囲気が柔らかいわよ。

「お好きに」

恥ずかしいけどね。

でも私は昔からこの、滅多に甘える姿を見せない娘のお願いには

弱いのよ。

「エドワード、ゲイルには私のこと、どこまで話してるの？」
「日本で養女を迎えた。それだけですよ。お母さんの今の名前も、前世の記憶があることも、養女に迎えた理由も経緯も、一切話してません。長老にはお母さんがダイアナだということだけ伏せてある程度のことは話しましたが」
「そっか。夏会で長老にばれると思う？」
「まず確実に、ばれるでしょうね。ばれても長老は黙っていて下さるかもしれませんが、ほかの方々はそうもいかないでしょう」
「あーもう、面倒だなあ」
「そもそも父に隠す必要あるの？」

娘はまっすぐだなぁ。お母さん嬉しいよ。

どうせばれるにしても、一番にあいつにばれるのは嫌。ただそれだけの私の意地。というのが理由の一つ目。
二つ目は奥さんがいるゲイルに無用な心労をかけたくないということ。現奥さんと元妻が目の前でそろい踏みなんて、気まずいことこの上ないだろう。
三つ目はゲイルの責任感。ゲイルのことだから、私がダイアナだと知ったら、いっそ自分の養女にするとか養育費を出させてくれとか言いだしそう。その程度には愛されて執着されていた自覚がある。
ゲイルが再婚してなければそれもよかっただろうと思うが、再婚している現状でそんなことをして、夫婦仲に亀裂が入らないわけがない。私はそれを望まない。
だからゲイルより先に一族にダイアナ＝月湖だとばらして、ゲイルの元妻よりエドワードの娘としての存在を周知したいというのが三つ目。

ということはまあ、娘にいう必要はないでしょう。

「今日ばれるのはまずいの。一族のみんなにばれたあとなら、ゲイルに知られようが構わないわ。だから今日だけは徹底してくれない？」

上目遣いでにっこり笑うと、シャンテルはこくこくと可愛らしく頷いてくれた。

持つべきものは素直な娘だね。かーわいい！

と、意気込んでやってきたのに、十年前とかわりないアパートメントはもぬけの殻だった。

あれ？　今日来るってエドワードが連絡していたよね？

どうやって私がダイアナだということを隠したまま、ダイアナの遺品のレシピを貰おうか、頭を悩ませていただけに、拍子抜けした。

「今日、お父様もちゃんと仕事を休むって言っておられましたわよね。それがなぜ、お父様も、マーガレットもおられないのかしら？」

「シャンテル、代わって。――ああ、久しぶり、父さん。ただいま。うん、今、実家。この前娘ができたから紹介しようと思って連れてきたけど、初めての長旅で疲れてるだろうし。一時間以内に帰ってこなければ帰るよ」

後ろで子供たちが携帯電話で父親に脅しをかけているのをよそに、私はダイニングの本棚、十年前と変わらない位置に収まっていた手書きのレシピを震える手で引き出した。

パラパラとめくると、懐かしい料理の数々が踊る。

作り方を目でなぞり、完成品の写真を撮ったときを思いだし。そ

の一品一品を食べたときの家族の感想。どの料理をどの品目と組み合わせたか。季節ごとの応用パターン。
それらを一つ一つ書き込んだときを思いだして、一気に懐かしさがこみあげてきた。それと同時に、悲しくなる。

私のレシピは、私が覚えているまったくそのままだった。最後の品目は、私が書き加えたものだった。
私が死んでから十年間、誰もこのレシピに新しい料理を書き加えなかったのだ。

「月湖。父さんは三十分以内に帰ってくるそうですよ。マーガレットのほうは連絡がつけば父さんといっしょに帰ってくるでしょう」
「ねえ、聞いたことなかったけど、マーガレットって、ゲイルの新しい奥さんの名前？」
「ああ、そうですよ。そこに写真がありますよ」

嫌な名前だ。ハイスクール時代の暗黒史を思いだす。
ああ、もう！　転生して一度も思いださなかったのに。

写真に写っていたのは、記憶にあるよりはるかに老けていたが、確かにハイスクール時代、私が大っ嫌いだった女だった。

「もしかして知り合いですか？」

睨みつけていた写真から目を離して、私は怪訝そうな顔をした息子に満面の笑顔を向けた。

「ううん？　知らない人よ」

マーガレットとの確執を子供たちに話すつもりは、私は欠片もなかった。大体、私は彼女を覚えていたが、彼女はハイスクール時代の数年、同じ学年だった私のことなど覚えていないかもしれないのだ。

彼女とダイアナの関係は終わったもので、それを掘り返して義理の母親と子供たちの関係に亀裂をいれる必要はない。

転生のいいところは、マイナスの関係をリセットできることかもしれないと思いながら、私はマーガレットのうつる家族写真をパタンと倒した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9575k/

ハニー・ファミリー

2010年10月14日19時03分発行